一、二才児のグループ形成

丸尾ひさ

現在の私たちの園は、保育園などというほどもないところで、小人数の共同保育所といった方が適切でしょう。現在普通の保育園（児童福祉法による）の他に、東京には、こうした共同保育グループが、少数ですが作られつつあります。それは、婦人が職業をもつということに、経済的な問題をも含めて理解の眼をむけられるようになってきていますので、その中で結婚し、子どもが生れたとき、その子どもの保育をどうしてゆくか、その解決法の一つとして、共同で保育者をたのみ、グループ保育をするという形態を、必然的にとるようになってあらわれたともいえます。

私たちの園もこうした必然性から生れ、主として、東京大学につとめをもつ人たちの満一才以下の子どもたちを共同保育することから始められ、やがて満五年になろうとしています。その間、現在に至るまで、専用の建物もなく間借り（四回の転居）をつづけ、経営主というものもきめずに、母親と、保育者の共同経営という形をとってきました。こういう中でいつも問題になるのは、幼い子どもをあずけてまで、勤めをつづけた方がいいだろうかということです。それには、個々の経済的な問題とか、自分の仕事に対する情熱ということも問題になってきますが、それは、また別の角度からみることとして、私は保育者として、この保育所を四年以上続けてやってきた、仕事に対する情熱がどこにあったかのべたいとおもいます。

数年前、こんな話をきき、私は、どうしてもそれを自分に与えられた場の中でやってみようと思いました。「チェコだったかで、保母さんが一人の子どもを抱きあげている。それをまわりにいる五、六人の子どもたちが、今度は必ず、順々に自分たちが抱かれることを確信しているような顔をして、抱かれている子どもの嬉しさを祝福して見上げている。普通なら、われ勝ちに抱かれようとしたみにくいようすがあらわれるだろうのに。子どもたちの間にも、皆が同じようにみとめられ、その立場が尊重されているようすがとても羨しかった」ということでした。幸に私たちのところは、他の保育園のように、十人もの乳幼児を、一人の保育

者が保育しなくてもすむ条件でした。が、他の子のもっている物は、たとえ自分が本当に欲しくなくても取り上げて、所有して満足したい、まだことばによって意志の交換が出来ない一才前後の子どもたちです。

どんなに小さい子どもたちでも、数人の子どもたちが共同生活するからには、その中で規律が守られなければなりません。小さいから無理だとか、まだ理解出来ないから甘く見てやるということは、これからずっと人間の社会の中で生きてゆき、次の世代の歴史を進めようとしてゆく、私たちの子どもの、成長してゆく可能性を信じないことになって、それこそ子どもにとって非常に失礼な見方といえましょう。

ではそれを、どうやって、具体的にやってゆけばよいだろうか。グループの中の子どもたちが、お互に理解しあいながら、各自の生活をのびのびとしてゆくには、どうしたらよいだろうかということを考えてみました。その中で、今まで幼児の発達の中でいわれているような、何才の子どもは並行あそびしか出来ないとか、社会性の芽生えはいつ頃から、などということは考えず、むしろ、私たちおとなの中で経験する人間同志のふれあいを、主としてみました。

共同生活の中でも一番主体となるのは、個人が安定した場をしめて、一人ひとりが満足していられるようにしなくてはいけない、各々の気持がみたされた上で、始めて他の人のことも考えられる余裕が出てくるのではないかということでした。

それには……どの子も同じように、保育者から、愛されているという安心感をもたせてやらなくてはならない。ことに養育者がいなければ、生きてゆくことの出来ない幼い子どもにとって、母親の代りによりどころとなる保育者を共有することは、なかなかむずかしいことですが、その保育者の愛情について安心感をもたせ、自分以外の友だちもいてやっぱり一人の保育者をたよりにしているのだということを教えてやること。そのために一人ひとり抱きあげて、メリーオルゴールの廻るのを見せてやり、ジュンバンということを、教えました。勿論これは必ず皆が揃っている時に公然と、〝自分だけが!!〟という気持をもたせないようにさせました。でもこの場合には、一方に「自分だけが」ある時間は、保育者に抱いてもらっているという満足感もあるわけで、その気持の中で、子どもは一応満足し、そういう〝抱かれごっこ〟の中で、同じ遊びをやりたがってる他の子どもたちを見出し、自分と同じ興味をもっている子どもを、発見し親しみをもつわけです。子どもの年令が高くなるに従って、こうした保育者と、子どもの体でのふれあいをだんだん少なくしてゆき、ことばとか、視線だけでも、感情を通じあえるようにしてゆきます。

また玩具や遊具を、皆でつかうようにする代りに、各々の食器は、色や形できめ、絶対に他の子のは使わないことにしまし

た。子どもたちが満三才をすぎた時、おとなには同じように見える椅子なのに、ちょっとついている印とか、ニスのぬり方の特徴などから〝コレハ〇チャンノ椅子ダ〟ときめているらしいので、その印は無視して、各自の名前を、平仮名で椅子のうしろにつけることにしました。自分の名のかいてある椅子を見つけなければ坐れないということから、自然と、椅子の特徴ばかりにたよらずに、自分の名まえの字を見つけ、字をよむことに興味をもつという方に発展してしまいました。これは別にそれを意図したわけではなく、他人のものを使わないことと、集団の中での、個という安定した場を与えてやることが大事だと思ったからです。但し私たちは、文字というもので、自分たちの意志を、他の人にもつたえられるのだということをおしえたかったのです。現在いる一才半の子どもは、絵本の中から「虫」を類推出来るようになったので……テントウ虫、デンデン虫、蜻蛉を、ムシというので……名まえのわきに、テントウ虫の絵をかいてあり、他の幼い子が坐っていると取りかえしにいきます。

こうして、自分の物や場を、一応おとなが守ってやる代りに、玩具はなるべく少なくし、とったり、とられたりを経験する中で〝カシテ〟とか〝カワリバンコ〟ということがだんだんわかるようにしてゆきます。そのなかで〝カワリバンコッテ、イツモ自分ノジャナインダモンネ〟という子どもなりの定義が生れてきます。

幼い時から、グループで生活している子は、家庭から来る子と比べて、遊びが、活潑で一人あそびとか並行遊びは見られず、他の子と交渉をもった遊びが多くなります。が、家庭から来る子どもも、始めは玩具を共有するということがわからず、独占しようとしますが、やはり次第にとりっこしながらも同年令の子どもと遊ぶのが面白くなり、また他の子どもと同じように、保育者にしてもらおうと働きかけてきます。このような、母親以外の自分と生活をともにしてくれようとする人に、愛されようと働きかける表情の中に、今までと違った美しい表情が出てくるような気がして、幼い子どもでも、一対一の母親とのみの生活以外に、同じ年代の子どもたちや、ひとりだちの生活も必要なのではないかと思われるのです。勿論、そのかねあいは非常にむずかしく、担当人数にもよりましょうが、小さい子には集団生活は無理だ、乳幼児は母親の膝元で育てられるべきだとばかりいわずに、忙しい母親に、「あれをしてはいけない」「これをいじってはいけない」とばかりいわれないですむような場をつくってやることも考えてほしいと思います。赤ちゃんにミルクをのませていると、補乳瓶をもちたがり、頬ずりしてやる一才半の子どもを見ていると、こんな、子ども同志の美しい愛情のふれあいの世界をつくり得る教育の仕事に、とても誇を感じてしまうのです。

（ゆりかご保育園）